

「野ばら」 第十一号に寄せて

野ばら 第十一号 目次

記録的な猛暑に見舞われた今年の長い夏がようやく過ぎ、横浜シユタイナー学園は六回目の秋・ミカエルの季節を迎えています。

学園の児童・生徒数は百名の大台に上ろうとしています。数年前から懸案となっていた「新しい校地・校舎探し」は、昨年夏の廃校舎利用に関する公募に選ばれなかった時点で振り出しに戻されましたが、今年七月に「将来は全学年が一つの校舎に集うこと」を確認しつつ、現校舎から徒歩で十分程のビルに「第二校舎」を構えることが決まりました。今年末から来年春にかけては、新しい校舎の改修工事が行われます。学園名物の「ボランティア工事」も随所に盛り込まれています。教師、生徒、保護者、スタッフ、友人たちの力が集まって、第三校舎にも横浜シユタイナー学園らしい手造りの温かな空間が生まれる予定です。

二〇一〇年度、わたしたちは多くの困難とともに日々の営みを続け、手探りで未来へと進んでいます。

この「野ばら」を手にとってくださいました皆様に、そんな「学園のいま」が少しでも伝われば幸いです。

二〇一〇年 十月

六・七年生担任 長井 麻美

効率的な授業とは

— 三年生の授業実践を通して — 横山 義宏 3
夢を生きる

— あるヴァルドルフ学校卒業生の卒業式式辞 —
アルネ・アンダーセン

楽譜の導入 訳 森尾 朋子 10
— 授業の実践より —

伏見 あかね 16

あとがき 神田 昌実 23



畑で (現4年生が3年生の時に)

(表紙画 長井 麻美)

効率的な授業とは

— 三年生の授業実践を通して —

教育に関するシユタイナーの講演で「授業は効率的に行わなければならない」という言葉がでてくる。

「教育芸術方法論と教授法」第九講では、特に高学年(十三歳から)の学習において、効率の高い授業を行うことで、たとえ偏狭であつても今日の社会が求める教育原理に見合った目標にも応えうる、と冒頭で述べ、何度も「効率的に授業を進める」と語られている。また、「社会問題としての教育問題」第二講では、教育を効率的に行うことで、こどもに凝縮したものがもたらされる。そして七歳から十四歳の間の教育は、思考、感情、意志を正しく発達させることに向けられなければならない、と述べられている。

前号でも書いたように、わたしは三年生の学習において、『くらしと仕事』に重点をおき、エポック授業のかかりの時間をその学習に当てた。エポック授業は他に国語や算数、フォルメン線描があり、残り少ない時間でこれらの科目も教えなければならない。時間を無駄にせず、かといって、こどもに負担をかけずに、教えるべきことは

四年生担任 横山 義宏

深く吸収させなくてはならない。自ずと「効率的」に取り組むことを考えなければならなかった。シユタイナー教育における効率化とはどのようなものであるうか。今回は、効率化を科目と科目とのつながり、総合性の観点から鑑みて三年生の授業について述べてみる。

一、実践前の学習

長さ、重さ、かさの学習を三年生では行う。長さは家造りの学習に合わせて、重さ、かさは、うどん作りに合わせて学習を計画した。

まず、単位が生まれる前の話をした。長さでは、柱を切るるとき、誰か人の背の高さに合わせれば同じ長さに切りそろえられることや、腕の長さを利用すること、重さではシーソーで体重比べをし、体と結びついた学習をした後、具体的な単位を学んだ。

そして実践に移した。指定された正しい長さに柱を切り、

夢を生きる —あるヴァルドルフ学校卒業生の卒業式式辞—

講演者 アルネ・アンダーセン

訳 エンゲルベルク・シュタイナー学校オイリュトミー教師 森尾 朋子

*アルネ・アンダーセン 自由ヴァルドルフ学校ブレンスブルクに十三年間在学。二〇〇九年夏アビトゥーア（大入学資格試験、ドイツでは最も難しい卒業資格試験）に合格。七月十七日（二〇〇九年）の終業式で、彼は心をうつ式辞を、在校生、父母、教師にむけて、行った。アルネは、アスベルガー症候群を伴う自閉症者である。

親愛なる、来賓及び友人の皆様、親愛なる先生そして父母の皆さん、親愛なる生徒の皆さん、そして、私の愛するすべての皆さん！

「おそらく皆さんは、「何をするつもりもし燃え上がったら」(was tun, wenn's brennt)という映画を知っているでしょう。この映画は、一九八〇年代の西ベルリンの六人のパンクの若者たちのことを描いています。彼らはこの社会を変革したいと考えていました。彼らはある高級住宅街の屋敷に爆弾を仕掛けます。この爆弾が13年もたつてから

爆発した時、警察によって摘発され、この六人は再び会うことになります。この映画は、ユーモアにあふれた手法で、とてもまじめなテーマを扱っているのです。そのテーマは、「多くの人々は、大人になって若いときに抱いていた理想を失ってしまう」ということです。人間らしく共に在ることを望み、そのためには戦うことを厭わぬとした、公正公平な世の中を夢見た若者たちが、この社会に順応する市民となっていくのです。私たちが今、アビトゥーアを手に、学校を去り、この世界で成功しようと歩みだすとき、この歩みは、理想によつて導かれたものとなつていくのでしょうか？ 私たちは、今もまだ、あこがれや未来像を抱いているのでしょうか？そして、その答えが、「Yes」だとして、私たちは、ずっと後になつてから、今、抱いている理想についてのどのように考えるでしょうか？私は、夢を抱く、という勇気を私たちが持っていることを望んでいます。未来の姿を信じるということは、私たちにとつて、ほかの世代の誰よりも、勇気がいることでしょう。私たちは、六十八年世代の失望的な例を見てきているからです。

それに加えて、私たちは今、不確実な予想のつかない世界に生きています。それゆえに、わたしたちにとつて、もっとも大きなあこがれは、狭苦しい壁を打ち破ることではなく、自分たちを守ってくれる壁を積み上げることなのです。

ですから、私たちは、たいへん世の中に適応している世代と風評されています。月刊誌「時代」は、私たちを「特徴（キャラクター）」のない世代と呼びました。最近、私が読んだ「シュピーゲル」誌のアンケート調査結果には、ドイツの若者たちの多くが、一度もデモに行つたことがなく、「非政治的」と名づけられることに何の抵抗もない、とありました。これは、私たちが、現実を覚めた目で見つめ、より良い世界を夢見ることをあきらめ、現実に適応していることとしていられるといえるでしょう。

一方で、私はこの学校での生活で、生徒の皆さんが、世界の現象に対して目覚めた観察者だということを経験しました。常に十分な情報を取り入れ、それがアメリカ大統領選挙についてであっても、経済危機についてであっても明瞭で感情に左右されない考えを抱いていました。私たちには、この世界が改革改良されなければならないのだということが、自明のこととしてあつたのです。そして、私たち以外の誰が、我々の世代以外の誰が、よりよき変革へのインパルスを抱くことができるのでしょうか？自分の生き方を通して、この世界を変えることができる

のだということが、私たちの一人ひとりに常に意識されていなければならないのではないのでしょうか。

塵芥（ちりあくた）の知恵

ここに、シラーの戯曲「ドン・カルロス」の中の二節、若者たちと彼らの理想について語っている言葉があります。

どうか言つてやってく下さい。

あの若者に、彼の若き夢の数々に対して、

彼が大人の男になつたときに、十分な配慮を抱いているべきことを。

理性の方がより高いところにあると誇っているくだんの、死をもたらず虫に、心を、こころ—この可憐な神々の花を、開いてはならないと。

そして彼は誤つてはならないと、塵芥の知恵が、熱情を、天の美しい娘を、脅かすことのなきよつに。